

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391500024		
法人名	医療法人社団孔和会		
事業所名	グループホームあかね苑		
所在地	熊本県天草市久玉町5716-9		
自己評価作成日	令和2年2月1日	評価結果市町村受理日	令和2年4月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	令和2年3月3日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域との繋がりを大切にし、地域の行事に参加したり苑の行事に誘致し交流を図っている。グループホーム隣では、認知症カフェを月2回行い、また地域の方向けに生き生き百歳体操を毎週火曜日に実施しており利用者様も地域の方たちと一緒に体操に参加するなど開かれた施設である。また、母体である病院が同一敷地内にあり急な体調変化にも対応でき入居者は勿論のこと、ご家族の安心にも繋がっている。また、共用型デイサービスを利用し入居者と通所者の交流も図れている。職員の教育にも力を入れていて法人内研修への参加は勿論、法人外研修への参加者は多機能ハウスとの合同カンファレンス時に研修内容を復講するなど、全職員のレベルアップを図っている。資格取得の希望者には法人においてできる限りのバックアップ体制を整えている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体医院に隣接するビルを改装した建物は、1階にグループホーム・共用型デイサービス・認知症カフェ、2階に小規模多機能ハウスがあり、最初から地域の方々が集まる場所であったかのようなたたずまいである。地域密着型サービス事業所として、運営推進会議でホーム運営への理解を得、連携・協力を図り、入居者が「天草の住民として自分らしく暮らし続ける」支援に努め、法人の自主事業や介護予防事業と共に地域活性化の一助となっている。計画的な人材育成のもと、職員は理念に基づく実践を図るため、一人ひとりの得意分野を認め合い話しやすい職場環境を目指し、施設内外の研修や同業者との交流を通じて介護技術のスキルアップや自らのQOLの向上にも取り組んでいる。医療・介護・介護予防・住まい・自立した日常生活などを一体的に支援する法人の一事業所として、ホームの取り組みは今後も地域住民の安心と安全な生活に繋がると期待が持てる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入居者様に対する想いは理念としている。理念は施設内の数箇所に掲示し職員一人ひとりが意識し実践しており、理念について話す機会をカンファレンスの時に設けている。また、家族や来苑者にも分るよう玄関には大きく掲示している。	理念と基本方針はパンフレットにも掲示し、入居者や家族・地域の人々に伝え、入居者を中心とする支援の姿勢を示している。介護計画の短期目標を示した日々の経過記録表に、一人ひとりの生活リズムに配慮した実践や気づき等を記録し、状況の変化に迅速に対応できる取り組みが行われている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域行事(どんど焼き、夏祭り、芋掘り、文化祭)に出掛けたり、保育園や小学校、老人会からの来苑もある。生き生き百歳体操、認知症カフェなどを通じた交流もある。また、日常の活動の様子を広報誌「あかね丸」で伝え地域の回覧板を利用させてもらい周知出来るようにしている。	「地域に出かける、地域から来ていただく」場づくりを大切にしている。認知症カフェやデイサービス、小規模多機能ハウスなどと日常的な交流を図っている。地域の回覧板と一緒に、法人事業所の活動内容や在宅生活での病気予防の知識などを掲載した広報誌を添えてもらい、地域密着型サービスを知ってもらうと共に健康管理についての周知啓発も行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症についての理解や地域で支える必要性などサポーター養成に努め、地域の方々と交流し共に取り組んでいる。また、苑に専門の講師を迎え地域の方々に向けた講演会を実施している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の運営推進会議で日々の活動や取り組みについて、また今後の予定について報告し委員の方々への参加も促している。委員の方から地域の情報収集も行っている。	運営推進会議では毎回、理事長から社会の動向・法人事業所の取り組み・話題となっている介護ロボット・介護問題などの紹介後に連携や協力依頼の言葉が伝えられている。市の会議記録様式に従い会を進め、身体拘束や虐待・緊急時対応・職員研修内容などについて意見交換を行い、ホームと地域が一体となって入居者の生活を支えているという認識を深め、サービス向上に活かしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	メールでのやり取りや運営推進会議へ包括支援センターからの出席もあり、意見交換し、よりよい協力関係を築けるよう取り組んでいる。	市行政からはホームの質問などに迅速に答えてもらう仕組みがあり、話しやすい良好な関係が築かれている。「看取りに伴うエンディングノートの書き方」についての質問から、社会福祉協議会を通じて講師を招いての講習会が開催され、地域住民や職員から良かったとの声が聞かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内やカンファレンスで拘束に対する勉強会を行い、知識を高め、より良いケアの提供に取り組んでいる。また、玄関の施錠は防犯目的以外行わない。	身体拘束・不適切ケア・虐待など権利擁護に関する施設内外の研修の学びを実践しながら、カンファレンスや運営推進会議で話し合い、拘束の弊害への理解を深めている。職員は入居者一人ひとりに適した言葉かけや意思表示ができる環境づくりに努め、ベッドなど心身の状況に合わせて配置し、転倒予防を図り、拘束のない支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内での研修参加は勿論のこと、法人外での研修や勉強会にも積極的に参加しカンファレンスで復講をし意識付けしている。虐待を見逃さないよう注意を払い、ストレスケアの取り組みも行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内での勉強会に参加したり外部の研修にも出掛け学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に契約書と重要事項説明書にて十分な説明を行い納得の上で署名捺印を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご意見箱を設置したり、ご家族の面会があった時や家族会でも意見や要望を聞いている。要望はスタッフで話し合ったり理事長に相談し対応するシステムがある。	年1回の家族会は、少人数の出席であっても意見や希望を伝えあう話しやすい会となっている。要望や苦情がある事をありがたいと捉えて職員会議で検討し、理事長に報告する仕組みがある。担当職員は家族に1年分の写真を添えた生活記録を送ったり、誕生会と一緒に楽しんでもらったりして本人や家族の要望を聞く機会づくりをしている。家族の要望に応じて共有空間の照明を明るくするなど、意見を運営に反映している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の業務の中で出た意見やカンファレンスでの意見や提案は早めに対応している。また、意見や要望を言いやすいよう個別面談も行っている。	職員の意見や提案は、会議や個人面接で理事長に届く体制づくりとなっている。職員はアセスメントをもとに、自らベッドの寝起きや室内での動きを再現し、心身の状況に適したベッド・ソファ・家具の設置をしている。配膳・下膳の場所など至る所に改善や工夫が認められ、入居者中心の実践となっていることが伺える。外部評価の自己評価は職員全体で考え、評価結果は実践の振り返りに活かしサービス向上に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	月2回の管理者会議や部署会議、ネットワーク会議において施設の問題点や職員の健康状態などについての報告や意見を出し改善へ向け努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外で行われている研修は掲示板に貼り希望の研修があれば参加できるシステムをとっている。特に認知症や身体拘束・虐待の研修については管理者からも呼び掛けをし参加を促している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会に職員も同席し自施設、他施設の取り組みを公にし意見交換を行ったり訪問などを行うことにより同業者全体での業務改善や質の向上を目指している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に訪問し家族を交えた面会を行い、本人の要望を伺い、傾聴し安心して入居していただけるようしっかり話し合いを行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前訪問時、本人を交えた面談とは別に、家族への面談を行っている。困りごとや要望等をしっかり聞き取り、家族の意に添えるよう努力することで信頼関係を構築している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族にとって今何が必要なのかどのサービスを利用すれば解決できるのかを見極め、他の事業所を紹介したり、法人内のネットワーク会議で意見を求めたり、より良い支援が出来るよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物を干したり畳んだり食材の皮むきや食材切り食器拭きや掃き掃除等、日常の家事を職員とともに行き支えあっている関係性を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の誕生日には誕生会を開き家族にも参加していただいている。地域や施設での行事にも参加を促し、家族や知人の顔がいつも見られる環境づくりを行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅近くへのドライブ、地域行事への参加、季節の花が咲く場所へ出かけたり馴染みが薄れず以前の関係性を継続できるよう努めている。また、家族の協力のもと外出したり、短時間の一時帰宅の支援も行っている。	高齢化などで家族や友人との関係性が少なくなる中で、積極的に馴染みの関係づくりに取り組んでいる。職員は入居者の幸せそうな表情を見ることが自分たちの喜びになる事を共有し、家族の誕生会参加・仏さん参り・一時帰宅・外出・帰宅願望時の対応などに家族の協力を得ている。カフェや小規模多機能ハウスと合同の行事でも馴染みの人と交流を楽しんでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	施設内での居場所、食事の席の配置、レクレーションやカルチャーでの席の配置等に工夫をし共に支え合う関係作りとなるよう職員は橋渡しを行う。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された時は面会に伺い、本人と家族の話しに傾聴するよう心掛けている。また、グループケアにも努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の暮らしの中でその人の行動や言動から、どのように過ごしていきたいのか、意向を汲み取り、カンファレンス等で意見を出し合い、その人らしい暮らしができるよう検討している。	個別の経過記録に介護計画の短期目標を明示し、24時間の生活リズムと言動や気づきを記録し、入居者の思いを把握している。職員は同業者の会合に出席した際には、入居者の意向の把握に有効な記録などの情報交換をして、その人らしい暮らしの向上に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族の面会時には現在の状況や状態を伝え、家族からはどのような暮らしをされていたのか、また生い立ちにも触れ、家族の情報を今後の介護に活かし役立てている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	今まで出来た生活習慣を継続できるように環境を整えたり、残存機能を生かし出来ることをお手伝いしていただく事で一日が有意義となるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画作成時点で担当者会議を行い、医師や必要に応じ作業療法士、理学療法士の意見も取り入れ家族や本人と計画内容を確認している。変更が必要になった場合には速やかに現状に即したプランへと変更している。	定期的にサービス担当者会議を開き、医師・理学療法士などの専門職員が出席し、家族と一緒に計画の内容を確認し合っている。遠くにいる家族には1年分の入居者の状況や運動メニューなどを知らせ、意向の確認をして計画の同意を得ている。入居者の課題は専門職員に相談しながら、入居者と職員が安全・安楽に移乗する介助法や適切な内服管理などの目標設定をして、現状に即した介護計画としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	経過記録用紙を用い日々の様子を記録している。その情報は職員間で共有し、状態やレベルの変化があればカンファレンスを行い必要に応じ介護計画の見直しを速やかに行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況とその時々ニーズに合わせ法人内の各専門職に助言や指導を仰ぎながら柔軟な対応ができるように取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事へ参加し、生き生き百歳体操や認知症カフェにも参加し、また保育園やボランティアの方々の慰問等、共に楽しむ時間を作り支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望を伺い納得して頂きかかりつけ医の受診に繋げている。結果は電話や面会時に報告している。また、専門医受診時はかかりつけ医の紹介状にて連携を図っている。	入居時に24時間医療連携体制下での日々の健康管理について説明し、かかりつけ医を決めている。入居前から母体医院を主治医としている入居者も多く、医師は月1回の訪問診療以外にもホームを訪れ触れ合う関係を持っていて、入居者と家族の安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	母体の看護師と施設の看護師での必要な情報は共有できており、必要に応じて受診へ繋げたり適切な治療が受けられるよう密に連携が取れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の対応は施設側からのサマリーにて情報の提供を行い、必要に応じ現在の状況を伺うなどし情報を共有している。日にちをおかず職員が見舞いに行くことで安心して頂き早期退院へと繋がるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に看取りについては説明しているが、いざ終末期を迎えた時には家族の意向をじっくり聞く時間を作りどのような終末を希望されるのか話し合い納得いただけるような支援に心掛けている。	入居時に「看取りの理念」と同意書に沿って説明し、終末期に再度意向の確認を行っている。104歳の緊急の看取りの話し合いでは、本人から「早く病院に連れて行って」と言われた事例もあり、かかりつけ医との馴染みの関係づくりのもとで、入居者と家族の要望に応える看取り支援となっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人内やカンファレンスで定期的に勉強会を実施している。また緊急連絡網により直ちにバックアップ体制が取れるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の訓練には消防署員、地域住民にも参加を頂き避難誘導などの手順や実践訓練を行っている。また非常持ち出し袋の準備など災害に備えている。	全国的に災害の報道が続く折、運営推進会議でも火災や津波を想定した災害訓練と地域の協力の必要性を検討している。ホームの近くに消防署がある事を強みとしながらも、到着まで時間がかかる事を想定し、避難場所までの具体的な避難訓練も実施している。昼間の訓練時はカフェの利用者も参加し、訓練の大切さを共有する啓発活動ともなっている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の生活パターンに合わせた行動や入居者様の身振り手振り表情での信号を見落とさずゆっくり優しい言葉かけをプライバシーにも十分配慮している。	入居者一人ひとりの生活リズムと、プライバシー保護を必要とする排泄や入浴、食事などの要望時の仕草を把握し、その人に適した声掛けや思いを大切にする支援をしている。介護計画に「気持ちよく」「安心」「楽しみ」ながら生活機能向上を図る支援の目標設定をして、自己決定しやすい雰囲気づくりに努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	難聴の入居者様には筆談やジェスチャーでコミュニケーションを図り、目の不自由な入居者様にはスキンシップを図りながら耳元でゆっくりと声かけをし本人が思いを伝えやすい環境づくりに努め、自己決定を一番とした支援をしている		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	天候や季節によって生活リズムに変化がみられるため、本人のその日の暮らし方を尊重し支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洗面や整髪は勿論の事、季節に合わせた衣類の選択は本人と共に行う等、おしゃれのお手伝いをしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は何よりも大切で楽しみなものと考え、食材の皮むきや食材切り等を職員と一緒にしている。また、個々の好き嫌いを把握し別メニューの提供も行っている。そして落ち着いて食事ができるように音楽にも心配りをしている。	献立表をもとに個別対応の食事を提供し、検査簿で適した食事になっているかを確認している。地域からの差し入れが多く、献立の変更をしながら旬の郷土料理が楽しんでいる。食事専用の棚で食事の内容を確認し、配膳と下膳の動線の区別を図っている。天草雑煮などのお節料理や季節ごとの行事食、おやつも楽しまれており、訪問当日にもゆっくり美味しく食事を風景が見られた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士の立てた献立を基に個々に合わせた形状にして提供している。水分が入り難い時はゼリーでの対応をし水分量の確保に努め日々の水分量チェックを行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを促しチェックしている。介助が必要な入居者様は介助し就寝前には入歯洗浄を行い清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンを把握し、また表情やサインを読み取りトイレ誘導している。	座位保持ができればトイレで腹圧をかけて排泄する支援を原則として、ウォシュレットを活用し清潔保持を図っている。歩行や車椅子でトイレに行く事がリハビリになるとして、トイレ誘導に努め、必要時はポータブルトイレを使っている。排泄用品は家族に準備してもらい、遠方に居る家族は業者からホームに配達してもらう仕組みとなっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日排便チェックを行っている。水分補給や運動で便秘を予防し、ヨーグルトや柑橘類の提供等で出来るだけ自然排便を促している。個々の状態に合わせた便秘薬や坐薬の使用も行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	バイタルや体調、その時の気分に合わせて入浴していただく。拒否がある場合は時間をずらしたり日を改める等、本人の意思を尊重している。また、入浴剤や柚子湯、菖蒲湯など季節を感じ楽しめるような支援を行っている。	2～3日に1回、午前入浴を基本としているが、拒否がある場合は午後に行い、一人ごとに湯を交換しマンツーマンや二人介助での支援をしている。入浴後はマッサージをしながら保湿剤を全身に塗り、全身の状態観察と皮膚の乾燥予防を図り、入居者と「皮膚がきれいね」と喜び合っている。	入浴拒否に関しては運営推進会議でも研修の学びを紹介し、情報や意見交換をしている。今後も個々の症状の進行度などを確認し、気づきを深め、評価・分析などをして、入居者一人ひとりの入浴を楽しくする支援の向上に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は活動や作業などを強要せず自由に休息できるように支援している。各居室には温度計と湿度計を設置し特に夜間は室温や乾燥等に気を付け暖房と加湿器は一對としている。また、寝具は清潔に保ち安眠できるよう環境を整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者様の病名を把握し、服薬支援できている。薬の変更や追加があればカンファレンスで看護師を中心に薬の勉強会を行っており、目的の把握も出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の得意分野を生かした役割分担を心がけ、強要せず楽しく楽しみながらできるような支援をしている。また体操やレクリエーション、散歩などでストレス発散や気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	地域行事に参加し地域の方々との交流を図っている。また、本人の希望があれば家族へ連絡し一時帰宅の支援も行い、家族や本人の希望があれば職員と一緒に他の施設に入所されている姉妹への面会にも伺っている。	高齢化や介護の重度化により外出の機会が少なくなったとしながらも、初詣・どんどや芸能文化祭・牛若交流会などに出かけ、その様子は写真で紹介している。カフェや一階と二階合同の音楽療法・餅つき・運動会などに参加したり、海辺の散歩・庭での食事会・ボランティアによる野点も楽しまれている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の希望もあり現金は施設で預かり金として管理し、必要時には手渡し自由に使っていただくようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば電話したり、家族からの電話を取り次いだり自由にできる体制を整えている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用スペースは心とむような空間づくりに努め、季節を感じられるようなディスプレイや季節の花を生けたりと工夫している。混乱の無いようトイレの扉には「便所」と張り紙をし、温度計や湿度計にて過ごしやすい温度調節に努めている。また視覚障害のある方には季節や天気などを一つ一つ説明している。	玄関の横に一段高くなった畳の間があり、古いミシンを花台にして、頂いた桃の花が活けてあった。くつろぎ用のソファや椅子には職員手作りのカバーをかけ、壁には季節ごとの入居者の作品や職員作品のマスコットを飾り、家庭的な雰囲気となっている。リビングとカフェには市の移動図書館の書棚があり、ボランティアによる読み聞かせにも利用されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファでゆっくりくつろいだり、畳スペースで横になったりと自由にできる空間を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に持ち込まれる寝具等は自宅で使用されていたものを推奨し、心地よい居室作りに取り組んでいる。	居室の窓の位置や入居者状況に適した家具の配置をし、馴染みの物を飾り住み心地の良い個室となっている。視覚障害のある入居者には、当たっても痛くなく傷つかないように昼と夜用の職員手作りのベッド柵カバーを使ったり、在宅酸素療法中の人には必要物品や酸素チューブ等を使い勝手良く収納し、清潔の保持を図る等、全ての居室から職員の創意工夫が感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室の入り口には自分の居室と分かるような目印がある。日付の確認は、職員が毎日掛け替えするカードを作り独自のものを使用している。		